
これからも、彼女で

光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

これから、彼女で

【Nコード】

N9496X

【作者名】

光

【あらすじ】

ある日の事だった。岡崎奈々は塾の帰り道、近道をしようと公園の道を通ることにした、た、だが、その公園の道は最近、奈々の学校の女子生徒が高校生くらいの2人組に襲われたと言う事件があり、学校では通行禁止と言われているのだが、奈々は公園の入り口で何もない事を祈り、公園の道に入って行った。

？ 塾の帰りに

「じゃあね——え」

塾の友達と別れ、自転車に乗って家に向かっていている時、ふと、いつも録っているお笑いの番組を予約してくるのを忘れた事に気づいた。

「あつ！ どうしよう」

考えながらペダルを踏んでいると。

「そうだ、公園の道を……。でも、あの道は夜は通っちゃダメって学校で言われているんだっけ、でも……………」

その公園の道は最近、奈々の学校の女子生徒が高校生くらいの2人組に襲われたと言う事件があり、学校では通行禁止と言われている道なのだ、考えたすえに奈々は公園の道を通って帰る事にし、公園の入り口で。

「何も、出ませんように」

祈り、公園に入りキョロキョロしながら漕いでいると、いきなり、目の前に金髪の男が飛び出して来て。

「あつ！」

ブレーキをかけ停まると、金髪の男が。

「ねえ、ねえ、どこ行くの？ 一緒に遊ぼうよ」

「い、急いでいるんで、退いて下さい」

ペダルに足をかけた時。

「つれねえなあ、いいじゃんかあよ」

背後から、もう1人の金髪の男が現れると、奈々は身の危険を感じ逃げようしたが。

「逃げんなよ」

男たちの顔が変わり、自転車のかごと後輪を持たれ、芝生の上に転ばされた。

「キヤア」

起き上がろうとすると、男Bが手を押さえられ男Aが馬乗りになると。

「へへへえ、君ってカワイイね、俺、好みだよ、へへへえ」

笑いながら、服に手をかけた時。

「だ、誰か助けて——え」

悲鳴を上げると。

「へへへえ、こんな夜に来る奴なんか、いねえよ」

服を破ろうとした時、男の頭に小石が中った。

「いてえ」

奈々から降り。

「誰だ、出てきやがれ——え」

キョロキョロしていると、暗がりから少年が出て来ると、男Aが。

「誰だ——あ、テメエ？」

「誰だっていいだろう、その子からを離してやれよ、このロリ野郎
お」

「ふつ、助けたかったら、俺たちを倒してみやがれや——あ」

男Aがもの凄い速さでパンチを繰り出すと、そのパンチは少年の
ほほに食い込み少年は吹っ飛んだのを見たBが。

「出た——あ、兄貴の殺人パンチ、あれを食らって平気な奴がい
ねえぜ、いたら見てみてえぜ、ハハハ」

大笑いした。

「そ、そんな」

少年を心配そうに見ていると、指がピクリと動き。

「いてててっ」

ほほをさすりながら立ち上がると。

「何！」

男たちは、あせり始めた。

「結構、効いたぜえ」

血を拭くと、少年の顔つきが変わり。

「パンチつてのは、こう出すんだよ——お」

Aのパンチより、速いパンチを腹に入れると。

「ぼふっ！　がはあああああ」

腹を押さえ、白目をむいて倒れたのを見たBは、奈々を離し。

「この野郎——お」

背後から、殴りかかった。

「キャッ」

奈々は手で目をふさいだ。

「がはあ、があああ」

声が聞こえ、恐る恐る指の隙間から見てみると、Bの鼻を押さえ座っていて指の隙間からは大量の血が噴き出していて。

「兄ちゃんたち、まだ、やるかい？」

Bは首を左右に振り、倒れているAをかかえ立ち去って行くと、少年は倒れている自転車を起こして、奈々の所に来て。

「大丈夫、ケガない？」

手を差し出すと。

「は・はい」

手につかまり、立ち上がると。

「あ、ありがとう」

礼を言くと、少年は。

「気を付けて、帰りな」

走り去って行き、奈々も家に帰り中に入って部屋で着替えてリビングに行く。

「ただいま」

「おかえり、遅かったわね？」

「う、うん、コンビニで立ち読みしてきたの」

「ふーん、そう」

嘘つき、部屋で明日の用意をして下着を持って部屋を出た。

？ 昨日の少年

次の日。

「いつてきます」

家を出て、学校に向かい歩き校門をくぐり、校庭を歩いていると隣に同じクラスで幼なじみの竹川沙織が来て。

「おはよう、奈々」

「おはよう、沙織ちゃん」

挨拶を交わし、歩きながら。

「ねえ、昨日の見た？」

「昨日は、見るの忘れちゃったの」

「面白かったのに」

「ふーん、そうだったんだ、残念」

教室に行き、席に座り机の中に授業道具を入れていると。

キンコーン、カンコーン、キンコーン、カンコーン。

チャイムが鳴ると、担任が入って来て教壇の上に出席簿を置き。

「えーえ、今日は出席を取る前に、新しいお友達を紹介します」

言つと、教室中が騒がしくなると。

「静かにして下さい」

生徒たちが静まると、老化に向かって。

「じゃあ、入って来て下さい」

廊下側から、1人の男子生徒が入って来た。

「はっ！」

奈々は驚いた、その男子生徒は昨日、不良たちから奈々を助けてくれた少年だった、担任がボードに小川光良と書き、光良の肩に手を置き。

「小川光良くんだ、皆、仲よくしましょうね」

「はい」

返事をする。

「じゃあ、小川くん一言、お願いします」
肩をポンと叩くと。

「初めまして、小川光良です、よろしくお願いします」
頭を下げると、拍手がわき。

「岡崎さん」

担任が奈々を呼んだ。

「はい」

返事をする、と、光良に。

「小川くん、あの子の隣に座ってくれるかな？」

「はい」

返事をし、あたえられた席に方に歩いて来て奈々を見て。

「君は、昨日の」

「私、岡崎奈々、よろしくねえ」

「うん、仲良くしようね」

座ると、出席を取り授業を始めた。

放課後。

ランドセルの中に、授業道具を入れていると。

「奈々、帰ろうよ？」

「うん」

学校を出て、帰り道を歩き沙織の家の前で。

「ねえ、宿題しようよ？」

「うん、いいよ、これ置いてくるね」

別れ、家に帰り中に入って部屋にランドセルの中から宿題を出し、
手提げに入れ部屋を出てリビングに行き母親に。

「沙織ちゃん家で、宿題して来るね」

家を出て、自転車に乗り沙織の家に向かった。

家に着き、自転車を降りてドアチャイムを押すと、ドアが開き沙
織が顔を出し。

「いらっしやい、どうぞ」

「おじゃまします」

上がり、部屋を入るとテーブルが用意しており2人は宿題を始め1時間後、奈々はノートを閉じて。

「終わった、沙織ちゃんは？」

「もう、ちよつと」

数分後。

「終わった」

沙織もノートを閉じると。

「ジュース持つてから、本でも見てて」

部屋から出て行くと、奈々は本棚からマンガ本を出し見ていると、お菓子と缶ジュースを持つて来て。

「はい」

「ありがとう」

飲みながら、マンガ本を見て数分後、見終えて。

「そろそろ、帰るね」

「うん、バイバイ」

沙織の家を出て、家に帰った。

？ キュン

光良が転校して1週間が経とうとしていた。

光良は頭が良く、スポーツ万能なのでクラスの人気者になっていた。

「いつてきます」

家を出て、学校に向かって歩き校門の所で、沙織に逢い。

「おはよう、奈々」

「おはよう、沙織ちゃん」

挨拶を交わし、教室で授業を受けた。

放課後。

ランドセルの中に、授業道具が入れていると。

「奈々、帰ろうよ？」

「うん」

学校を出て、帰り道を歩き沙織の家の前で。

「じゃあね」

「うん、バイバイ」

別れ、家に帰り中に入ってリビングに行き母親に。

「ただいま」

「おかえり」

冷蔵庫からジュースのボトルを出しグラスに注ぎ飲み、部屋で宿題を始め問題を解いていて間違えて、筆箱の中から消しゴムを出して小さくなった消しゴムを見て。

「買いに行こう」

財布を持って家を出て、自転車に乗って文房具店に向かった。

文房具店に行く途中で、キョロキョロしている光良が見え。

（どうしたんだろう？）

光良の元に行き。

「小川くん、どうしたの？」

「あつ！ 岡崎さん、文房具店ってどこだか教えて？」

「いいよ、一緒に行こう」

2人は、文房具店に向かった。

文房具店に着き、自転車を降りて店内に入り奈々は消しゴムとついでにかえ芯を、光良も替え芯とノートを2冊持ってレジで支払いをして店を出た時、笑みを浮かべて。

「ありがとう、助かったよ」

礼を言われた時、奈々の胸がキュンと締め付けられる感じがして。
（何、この感じ？）

胸を押さえていると、心配そうに。

「どうしたの、大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ、じゃあね」

家に帰り、部屋で宿題の続きをしながら、光良といた時に感じた感じの事を考えた。

「あれって、何だったんだろう？」

しばらく考えたが。

「まっ、いいか」

宿題に集中した。

次の日。

「いつてきます」

家を出て、学校に向かい歩き校門の前で、沙織に逢い。

「おはよう、奈々」

「おはよう、沙織ちゃん」

校庭を歩いていると、隣に光良が来て。

「おはよう」

「おはよう、小川くん」

沙織は挨拶したが、奈々はまた胸が締め付けられる感じがし。

（あつ！ まだだ）

歩いていると。

「小川くん、もう学校に慣れた？」

「うん、少しね」

笑みを浮かべ答え、教室に行き授業を受けた。

放課後。

ランドセルの中に、授業道具を入れていると。

「奈々、帰ろうよ？」

「うん」

学校を出て、帰り道を歩き沙織の家の前で。

「買い物に、付き合ってよ？」

「うん、いいよ」

別れ、家に帰り中に入って部屋にランドセルを置き、財布を持って部屋を出てリビングに行き母親に。

「沙織ちゃんと、買い物に行つて来るね」

家を出て、自転車に乗って沙織の家に向かった。

家の前で、沙織が待っている。

「お待ちどう」

「行こう？」

「うん」

近くのスーパーに向かった。

スーパーに着き、自転車を降りて店内に入り買い物がこを持ち、シャンプーとリンスの詰め替えと生理用のナプキンを入れたのを見て。

「沙織ちゃん、もう？」

「奈々は、まだなの？」

「う、うん……」

レジで支払いをして店を出て、自動販売機の前で沙織はお金を入れ。

「どうぞ」

「えっ！ いいの」

「うん」

「じゃあ」

スポーツ飲料のボタンを押すと、ガタンツと商品が落ちて来て取り出すと、沙織も同じのを買い来た道を戻り沙織の家の前で。

「じゃあね」

「うん、バイバイ」

別れ、家に帰り中に入ってリビングに行き母親に。

「ただいま」

「おかえり」

「夕飯、出来たら呼んでね」

部屋に行き、宿題を始めた。

？ 好きな子

あいかわらず、光良を見ると胸が締め付けられる感じは続いていた。

「いつてきます」

家を出て、学校に向かって歩き校門をくぐり、教室に行き机の中に授業道具を入れていると、光良が来て。

「おはよう」

挨拶されたが、また胸が締め付けられる感じがして何も言えなかった。

キンコーン、カンコーン、キンコーン、カンコーン。

チャイムが鳴ると、担任が入って来て出席を取って授業を始め、ボードに問題を書いて。

「じゃあ、この問題を小川くん、解いてくれるかな？」

「はい」

席を立ち、ボードの前に行き問題を解くと、担任が生徒たちに。

「これで、合っていますか？」

「合ってまーす」

声をそろえて言う。

「ありがとう、戻っていいよ」

光良が座ると、授業の続きを始めた。

放課後。

ランドセルの中に、授業道具を入れていると光良の所に糸井加奈が赤い顔をして立ち。

「小川くん、ちょっといい？」

「うん」

教室を出て行くのを見ながら、授業道具を入れていると。

「奈々、帰ろうよ？」

「うん」

学校を出て、帰り道を歩きながら沙織が赤い顔して。

「ねえ、奈々？」

「何」

「奈々って、小川くんの事、どう思う？」

「どう思うかって？」

不思議そうに聞くと、

「好きか、嫌いかって事」

「別に、隙とか嫌いとか思わないよ、まさか！　沙織ちゃん小川くん事が？」

言つと、さらに顔をして。

「そ・そんなに、大きな声で言わないでよ、それで明日、告白しようと思うの？」

歩き、沙織の家の前で。

「この話、絶対、秘密だよ」

「うん、わかった、じゃあね」

別れ、家に帰る道を歩きながら。

（何で、小川くんを見ると胸が締め付けられる感じがするだろう？　他の男子を見ても平気なのに、何でだろう？）

考えながら歩いていると。

「岡崎さん」

立ち止まり振り向くと、光良が走って来て。

「岡崎さんの家って、この辺なの？」

「う・うん」

頷くと。

「じゃあ、一緒に帰ろうよ？」

「う・うん」

歩き始め数分、奈々の家の前で。

「私ん家、ここなんだ」

指を差すと。

「僕ん家と、そんなに離れていないんだね、じゃあ」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入ってリビングに行き母親に。

「ただいま」

「おかえり」

部屋に行き、宿題を始めた。

次の日。

「いつてきます」

家を出て、学校に向かい歩き校門をくぐり、教室に行き授業を受けた。

放課後。

ランドセルの中に、授業道具を入れていると光良の所に沙織が赤い顔をして立ち。

「小川くん、話があるんだけど、いいかな？」

「うん」

教室を出て行く姿を見て、気になった奈々は見つからないように後をつけて行き、校舎の裏で2人の姿を見つけ陰に隠れて話を聞いた。

「話って、何？」

聞くと、タジタジしながら。

「わ・私と、つ・付き合って下さい」

告白に。

「ごめんなさい、僕には好きな子がいるから竹川さんとは付き合えないよ、ごめんなさい」

誤ると。

「うっん、私こそ、ごめんね、じゃあね」

奈々は急いで教室に戻り帰りたくをしていると、元気のない沙

織が戻って来てランドセルを背負った時。

「沙織ちゃん、帰ろう?」

「う・うん」

学校から出て、帰り道を歩きながら。

「さつきねえ、小川くんに告白したんだけどダメだったよ、好きな子がいるんだってさあ」

「ふゝん」

「でも、小川くんの好きな子って、誰、なんだろうねえ?」
話しながら歩き、沙織の家の前で。

「じゃあね」

「うん、バイバイ」

別れ、家に帰り中に入ってリビングに行き母親に。

「ただいま」

「おかえり」

部屋に行き、宿題を始めた。

？ 告白

光良の好きな子は、わからないまま数日が過ぎた。

「いつてきます」

家を出て、学校に向かい歩き校門の前で、光良に逢い。

「おはよう、岡崎さん」

「おはよう、小川くん」

挨拶を交わし、校庭を歩いていると隣に沙織が来て。

「おはよう、奈々に小川くん」

「おはよう」

挨拶を交わし、教室で授業を受けた。

放課後。

ランドセルの中に、授業道具を入れていると。

「岡崎さん」

「何？」

「ちよつと、話があるんだけど、いいかな？」

「いいよ、何？」

「ここじゃあ」

「じゃあ、場所、変えよう」

教室を出て、学校で一番高い木の下に来ると。

「小川くん、話って何？」

光良は、赤い顔をして。

「僕、岡崎さんの事が好きです」

いきなりの告白に。

「えっ！」

驚いた、光良の好きな子は、なんと奈々だった。

「それで、僕と付き合ってくださいませんか？」

数秒の沈黙後。

「いいよ、付き合っても」

「本当？」

「うん、よろしくねえ」

教室に戻り、ランドセルを背負い学校を出て、帰り道を歩き奈々の家の前で。

「じゃあ」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入りリビングに行き母親に。

「ただいま」

「おかえり、これから買い物に行くんだけど、行く？」

「うん、行く」

部屋にランドセルを置き、母親と自転車に乗り近くのスーパーに向かった。

スーパーに着き、自転車を降り店内に入り買い物かごを持ち。

「奈々、何食べたい？」

「うーんと、ハンバーグ、ママ、お菓子買っていい？」

「いいけど、夕飯を食べてから食べるのよ」

「はーい」

お菓子コーナーに行くと、沙織がいて。

「沙織ちゃん」

「あっ！ 奈々、買い物？」

「うん」

お菓子を選び始め。

「これにしよう」

新発売のスナック菓子を持つと。

「私も、それにしよう」

同じのを持ち。

「じゃあね」

「うん、バイバイ」

別れ、奈々はお菓子をかごの中に入れてレジで支払いをして店を出て、来た道を戻り家に帰り中に入ると。

「宿題をしてから、ご飯を食べるねえ」

部屋に入って宿題を始めた。

？ 映画館

2人が付き合い始めて、初めての土曜日。
放課後。

「岡崎さん、帰ろう?」

「うん」

学校を出て、帰り道を歩き奈々の家の前で。

「岡崎さん、明日、遊びに行こうよ?」

「いいよ」

(これって、デートの誘い?)

答えると。

「じゃあ、?時に迎えに来るよ」

「うん、待つてるから、バイバイ」

別れ、中に入りリビングに行き上機嫌な声で。

「ただいま」

「おかえり、何かいい事でも合ったの?」

「まゝね」

冷蔵庫からジュースを出しグラスに注ぎ飲んで、部屋に行き宿題を始めた。

次の日。

8時に起き、お気に入りの洋服を着て部屋を出てリビングに行き母親に。

「おはよう」

「おはよう、どうしたの、こんなに早く?」

「?時に、友達と遊びに行くの」

座ると。

「朝飯は？」

「パンとスクランブルエッグ」

頼むと、作り始め出来上がりテーブルに置くと。

「いただきまーす」

食べ始め、全部食べ居間でテレビを見ていると。

ピンポーン。

ドアチャイムが聞こえ、テレビを消し玄関に行きドアを開けると、
光良が立っでいて。

「おはよう、行こうか？」

「うん」

家を出て、自転車に乗り。

「ねえ、どこ、行くの？」

聞くと、ポケットから映画のチケットを出し。

「これ、観に行こうと思って」

「これ、観たかったんだ、早く行こう」

映画館に向かった。

映画館に着き、自転車を降りて入場口でチケットとお金を出し館
内に入り、スクリーンから5列目に座りブザーが鳴り響くと、館内
の明かりが徐々に暗くなり、真っ暗になるとスクリーンに映像が映
し出された、2人が観ている映画は人気マンガ雑誌のマンガ家が映
画のためにだけ書き下ろした作品で、2人は真剣に観て2時間が経
ち映画は終わり館内から出ると、あまりの日差しに。

「眩しい」

目の上に手をかざしていると。

「ねえ、お昼、ファミレスでいい？」

「うん」

自転車に乗り、ファミレスに向かった。

ファミレスに着き、自転車を降り店内に入ると昼時なので大勢の

人が食事をしていて、キョロキョロしているとウエイトレスが来て
「いらつしゃいませ、何名さまですか？」

「2人です」

「では、こちらにどうぞ」

空いている席に案内してくれ、2人が座ると。

「お決まりになりましたら、お呼び下さい」

去って行くと、テーブルの横にあるメニューを取り、ひろげ選び
始め数分後。

「決まった？」

「うん」

ブザーを押すと、ウエイトレスが来て。

「お決まりのでしょうか？」

オーダーを取る準備をすると。

「岡崎さんから、どうぞ」

「私は、ミートソースとポテトサラダとオレンジジュースで」

「僕も、ミートソースと海草サラダとアイスコーヒーで、以上で」

頼むと、インプットして。

「少々、お待ち下さい」

去って行き数分後、料理が運ばれて来て。

「お待ちどうさまでしたーあ」

目の前に置かれ。

「ごゆっくり、どうぞ」

領収書がはさんであるプレート置いて去ると、食べ始め全部食
べて食休みをして。

「出ようか？」

「うん」

プレートを持って、レジで支払いをして店を出て、来た道を戻り
奈々の家の前で。

「今日は、楽しかったよ、ありがとう」

「喜んでもらえて、僕もうれしいよ、じゃあ」

「うん、バイバイ」
別れ、中に入った。

？ なぞの女の子

夏休みに入り5日が経った。

涼しいうちに宿題をして、テレビを見ていると電話がなり母親が電話に出た。

「はい、岡崎ですけど？ ちょっと、待ってて」

受話器を置き、奈々の所に来て。

「沙織ちゃんから、電話よ」

「はい」

テレビを消し、電話に出た。

「もしもし、何？」

プールに行こうよ、と言う誘いの電話で。

「うん、今から行くね」

電話を切り、部屋に行きタンスの中から水着を出し手提げに入れ部屋を出て、リビングに行き。

「沙織ちゃんと、プールに行つて来るね」

家を出て、自転車に乗って沙織の家に向かった。

家の前で、沙織が待っていて。

「お待ちどう」

「行こう」

「うん」

近くのプールに向かった。

プールに着き、自転車を降りて館内に入り料金を払い、更衣室に入り水着に着替え沙織と合流すると。

「奈々、去年より、おっぱい大きくなったんじゃない？」

胸に手を当て言つと。

「早く、泳ごう?。」

「うん」

更衣室を出て、プールに出ると大勢の人たちが泳いでいて、2人も準備体操をして中に入り。

「冷たい」

言っている。

「奈々」

「うん」

沙織の方を見ると。

「それーえ」

水をかけ、濡れた顔を見て。

「あつ! はははあ」

「もーお」

膨れ面をし。

「お返しーい」

水をかけ返し遊んでいると沙織が。

「ねえ、あれ? 小川くんじゃない」

指をさした。

「あつ! 本当だ」

呼ぼうとした時。

「光くん、お待ちどう」

更衣室の方から見知らぬ女の子が走って来て、光良と合流し楽しそうに話をしている姿を見て。

「あの子、誰だろう?。」

「知らないよ、泳ごう?。」

クロールで泳いで行くと。

「待つてよ」

奈々の後を追いかけて行き、奈々は壁に手がつき水の中から顔を出すと拭いていると、沙織も顔を出すと。

「光くん、競争しようよ」

さっきの女の子の声が聞こえ、その姿をみた奈々は

「私、出るね」

出て、更衣室に走って行き沙織も奈々を追って行き、シャワーを浴び外に出て自転車に乗り。

「ねえ、次、どこに行く？」

「宿題しなくちゃだから、帰るね」

別れ、家に帰り部屋で光良といった女の子の事を考えた。

（あの子って、誰、なんだろう？ 小川くとあんなに楽しそうに話していたけど、どういう関係、なんだろう？）

考えていると、子機が鳴り部屋を出た。

次の日。

昼食を食べていると、電話がなり母親が出た。

「はい、岡崎ですけど？ ちょっと、待ってて」

受話器を置き、奈々の所に来て。

「沙織ちゃんから、電話よ」

「ふあゝい」

口の中の物を飲み込み、電話に出た。

「もしもし、何？」

ゲームを買いに付き合っという内容で。

「うん、今から行くね」

電話を切り、部屋に行き財布を持って部屋を出て、リビングに行く母親に。

「沙織ちゃんと、買い物に行ってくるね」

家を出て、自転車に乗って沙織の家に向かった。

家の前で沙織が待っていて。

「お待ちどう」

「行こう」

「うん」

近くのゲームショップに向かった。

ゲームショップに着き、自転車を降りて店内に入りレジに行き予約したゲームCDの引換券を出しゲームCDを受け取り、ゲームを見ている奈々の所に来て。

「帰ろう?」

「うん」

店を出た時、自転車に乗った光良と例の女の子が来て。

「やあ、岡崎さんに竹川さん」

奈々が沙織の背後に隠れると。

「小川くん、その子、誰?」

「紹介するよ、僕の従姉妹でって言うんだ」

「従姉妹」

2人か、驚いていると。

「舞、僕のクラスの岡崎さんと竹川さん」

「初めまして、小川舞です」

頭を下げ、2人が会釈していると。

「竹川さん、何のゲーム買ったの?」

聞かれると、袋からゲームを出して。

「これ、買ったの」

「ふーん、それじゃあ」

店に入って行き、2人は自転車に乗って来た道を戻り沙織の家の前で。

「ゲーム、やろうよ?」

「うん」

家上がり、部屋でゲームをやり1時間後。

「私、帰るよ」

「うん、バイバイ」

沙織の家を出て、家に帰った。

？ 花火大会

夏休み最後の日。

すでに宿題の終わっている奈々は、録画した番組を見ていると、電話がなり一時停止をして電話に出た。

「はい、岡崎です」

電話の相手は沙織で、宿題を写させて、と言う内容で。

「うん、今から行くね」

電話を切り、部屋に行き宿題を手提げに入れて部屋を出て、リビングに行き母親に。

「沙織ちゃん家に、行ってくるね」

家を出て、自転車に乗り沙織の家に向かった。

家に着き、自転車を降りてドアチャイムを押すと、ドアが開き沙織が顔を出し。

「いらっしやい、どうぞ」

「おじゃまします」

上がり、部屋に入ると宿題を出し。

「はい」

「ありがとう、本でも見てて」

受け取り宿題を写し始め、奈々は本棚からマンガ本を出し見始め数十分後。

「終わった」

宿題を閉じ、奈々に返すと。

「ゲーム、しようよ？」

「うん」

ゲームの電源を入れ、テレビを点けると画面にタイトルが映り、奈々は2コンを持つとスターとボタンを押しゲームは始まった、2

人がやっているゲームはブロックを組み合わせで消すと言うゲームで数時間やって。

「ジュースを持ってくるね」

部屋を出て行き数分後、戻って来てジュースをグラスに注ぎ。

「はい」

「ありがとう」

飲んでいると。

「ねえ、今夜、花火を観に行こうよ？」

「うん、いいよ」

「じゃあ、7時に私ん家に集合ね」

「うん、わかった、じゃあね」

沙織の家を出て、帰り道で光良に逢った。

「やあ、岡崎さん」

「ねえ、小川くん、夜、花火を観に行ける？」

「うん、大丈夫だよ」

「じゃあ、7時に家に来てよ」

「うん、わかった、じゃあ」

別れ、家に帰り中に入ってリビングに行き母親に。

「ただいま」

「おかえり」

「夜、花火に行くから、ご飯」

「はい、はい」

キッチンに行き、夕飯を作りテーブルに置くと。

「いただきます」

食べて、テレビを見ていると。

ピンポン

ドアチャイムが聞こえ、テレビを消し玄関に行きドアを開けると、

光良が立っていて。

「お待たせ」

「行こう？」

家を出て、自転車に乗り沙織の家に向かった。

家の前で、沙織とクラスメイトの小島小百合と坂本文恵と須藤裕美が待っていて。

「お待ちせ」

「行こう？」

「うん」

花火大会が行われる河川敷に向かった。

河川敷に着くと、すでに大勢の見物人が集まっていて自転車を降りて、出店でジュースと食べ物を買った花火が一番見える場所に座ると、花火師が用意してある花火に次々と火を点けて行った。

ヒューウ ドドドン。

もの凄い音と共に、夜空に綺麗な花を咲かせると拍手と歓声がわき1時間経ち、最後の花火「暴れ？連発」が打ち上がり始めると、まるで昼間のように明るくなり大拍手がわき花火大会は幕を閉じ自転車に乗り。

「じゃあね」

「バイバイ」

それぞれの家に帰って行き、奈々は光良と帰り奈々の家の前で。

「じゃあ」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入ってリビングに行き母親に。

「ただいま」

「おかえり、どうだった花火は？」

「うん、すごく綺麗だったよ」

部屋に行き、明日の用意をして下着を持って部屋を出た。

？ ハッピーバースデー

2学期が始まり、5日が経ち今日は奈々の？回目の誕生日。
「いつてきます」

家を出て、学校に向かい歩き校門の前で、光良に逢い。

「おはよう、岡崎さん」

「おはよう、小川くん」

挨拶を交わし、教室で授業を受けた。

放課後。

奈々は、沙織と小百合と文恵と裕美をバースデーパーティに誘い、ランドセルの中に授業道具を入れていると。

「岡崎さん、帰ろう？」

「うん」

学校から出て、帰り道を歩き奈々の家の前で。

「今日、私の誕生日なの、それで7時からバースデーパーティをするんだけど」

「うん、もちろん」

「じゃあ、待ってるね」

別れ、中に入りリビングに行き母親に。

「ただいま」

「おかえり、今夜、何人来るの？」

「5人だよ」

「じゃあ、お料理、いっぱい作らないとね」

「お願いね」

部屋に行き、宿題を始めた。

そして、7時5分前になり。

ピンポン。

ドアチャイムが聞こえ、部屋を出て玄関に行きドアを開けると、沙織たちが立っていて。

「いらっしやい、どうぞ」

「おじゃまします」

上がると。

「部屋で待つてて」

キッチンに行き、冷蔵庫からジュースのボトルを出していると。

「誰か、来たの？」

「沙織ちゃんと小百合ちゃんと文恵ちゃんと裕美ちゃんた」

「後1人のお友達は？」

「もうすぐ来るよ、用意が出来たら呼んでね」

ボトルと人数分のグラスをお盆にのせて、部屋に行きグラスにジュースを注ぎ。

「はい」

「ありがとう」

4人は飲み始め、沙織が紙袋を出し。

「はい、皆から」

「ありがとう、開けていい？」

4人が頷くと、袋を開け中を見ると前から欲しかったCDアルバムが入って行っていた。

「これ、前から欲しかったんだあ、ありがとう」

礼を言っていると、子機がなり出ると（用意が出来た）言う電話で。

「わかった、今行く」

電話を切り。

「用意が出来たって、行こう」

部屋を出て、客間に行くとテーブルの上に沢山の料理と真ん中に大きなケーキが置いてあり5人が座った時。

ピンポン。

ドアチャイムが聞こえ、玄関に行きドアを開けると、光良が立っ
ていて。

「遅くなって、ごめん」

「いいよ、上がって」

「おじゃまします」

上がり、奈々と一緒に客間に行く隣に座らせると、母親がロウソ
クに火を点け電気を消しハッピーバースデーを歌い、ロウソクを拭
き消すと電気を点けパーティは始まりワイワイとにぎやかに言い
時間位経つと沙織が。

「私たち、そろそろ帰るよ」

立ち上がり、玄関まで送り。

「今日は、ありがとうね」

「じゃあ、明日ね」

「うん、バイバイ」

帰って行き、客間に戻りケーキを食べていると。

「僕も、そろそろ帰るよ」

立ち上がり、玄関まで送るとポケットから小さな紙袋を出し。

「はい、プレゼント」

「ありがとう」

受け取ると。

「じゃあ」

「うん、バイバイ」

帰って行くと、客間に戻り方付けを手伝っていると母親が。

「あの男の子、なんていう名前なの？」

「小川光良くんって言うんだ、6年生になってから転校して来たの」

「そうなの、ひょっとして彼氏？」

「うん」

赤い顔をして頷き、片付けを部屋に行き光良からもらった紙袋を
開けると、中に光良と同じキーホルダーが入っていてランドセルに
付けて、下着を持って部屋を出た。

？ 運動会

周りの木々が紅葉し始めた？月。

今日は、小学校、最後の運動会。

「いつてきます」

体操着で家を出て、学校に向かって歩き校門の所で、光良に逢い。

「おはよう、岡崎さん」

「おはよう、小川くん」

挨拶を交わし、教室に行くと女子たちが一箇所に集まっいて。

（どうしたんだろう？）

心配になり輪の中に入って行くと、そこには足に包帯を巻いた加奈が痛々しそうに座っていた。

「加奈ちゃん、どうしたの、その足？」

「昨日、弟とリレーの練習をしてたら捻挫しちったの、最後の運動会なのに」

残念がつっていると、女子たちが。

「どうしようか？ 加奈ちゃんの代わり」

話し合っていると、奈々が。

「私が加奈ちゃんの分も走るよ」

名乗り出ると、女子の学級委員の矢島貴子が。

「奈々、2回も大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ」

答え、出走名簿に書き込んでいると、担任が教室に来て出席を取り。

「じゃあ、外に出て下さい」

担任の指示に従い外に出て、開会式が終わり1年生を残し昨日出した椅子に座り、学年の短距離走を見て数十分後、6年の短距離の時間なり席を立ち競争を行い場所に行き、第1走者がスタートライ

ン立つとスターターの教師がピストルを空に向けてならずと、一斉に走り出しゴールすると次々と走って行き、光良の番になりピストルの音と共に走り余裕の1位でゴールして男子が終わって女子の番になり、男子と同様に行われて奈々の番になり2位でゴールして短距離走が終わって籍に戻り、1年と2年の最後の競技を見て教室に戻り軽い食事を食べて食休みをするとチャイムがなり、午後の部が始まり3年生の対抗リレーから見始めて数十分後、6年の対抗リレーの時間になり校庭の真ん中で走る順番に並んで座り第1走者に各クラスのバトンが渡され、スタートラインに立つとピストルがなり一斉に走り出した、順位は2組1組4組3組と奈々の組は3位を走っていて？走者目で2位になりアンカーの光良にバトンが渡ると1位を走っている1組を追いかけに行き最後の直線で1組を抜き1位でゴールすると拍手がわいた、続いて女子の番になりピストルの音と共に一斉に走り出した、順位は3組1組2組4組と最下位を走っていて8走者目で3位になり奈々の1回目の出走の番が来て、沙織からバトンを受け取り2位を走っている

3組を追いかけて行き第2カーブで抜いて、貴子にバトンを渡してトラックの中で。

「ハア、ハア、ハア」

息を整えていると、女子たちが心配そうに。

「奈々、大丈夫？」

「大丈夫、大丈夫だよ、へへへ」

言っていると、レースを観ている生徒たち騒ぎ始めコーナーを見ると4組が1位なっていて、奈々の2回目の出走になりスタートラインに立ち隣を見ると6年で一番速い1組の女子の秋元舞が立っていて文恵からバトンを受け取り走り出し、第2カーブでスタート地点をチラッ見すると、舞が走り出す所で奈々はペースを上げて走っていたが、舞に抜かれてしまい2位でアンカーの裕美にバトンを渡した、裕美は最期の直線で1組を抜いてゴールをすると男女は大喜びした対抗リレーは男女1位と言う成績で幕を閉じ、閉会式で4組

には2枚の賞状とトロフィが送られ運動会の幕は閉じ、教室に戻り担任を待っていると担任が2枚の賞状とトロフィを持って入って来て教団に置くと。

「今日はおめでとう、家に帰ってよく疲れを取って明後日に元気な姿で会いましょう、じゃあ、日直さんお願いします」

「規律」

生徒たちが、立ち上がると。

「礼」

頭を下げると、担任が出て行くと。

「奈々、帰ろう?」

「うん」

学校から出て、帰り道を歩き奈々の家の前で。

「じゃあ」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入りリビングに行き母親に。

「ただいま」

「おかえり、今日はがんばったから、夕飯は大すきなカニクリームコロッケにするね」

「わーい」

部屋に行き、雑誌を見ているうちに眠ってしまった。

？ 修学旅行

？月も終わりに近づき、今日は一泊二日の修学旅行。

「いつてきます」

家を出て、学校に向かい歩き校門の所で、光良に逢い。

「おはよう、岡崎さん」

「おはよう、小川くん」

挨拶を交わし、校門をくぐるとたち生徒たちが集まっていて合流し担任が出席を取っていると、校庭にバスが4台入って来て生徒たちの前に停まると。

「じゃあ、バスが来たので、乗って下さい」

バスに乗ると、目的地に向かって走り出した、バスの中ではカラオケやクイズとかしてワイワイとにぎやかで数時間後、目的地に着くとバスから降りて記念写真と撮ると。

「じゃあ、これから1時間の自由時間にします」

生徒たちは散らばり、奈々も沙織と小百合と文恵と裕美たちとお土産や夜食に食べるお菓子を買っていると、集合の合図が聞こえ担任の所に集まり点呼を取ってバスに乗り今夜、泊まるホテルに向かった。

数分後、ホテルに着きバスを降りて中に入ると支配人とホテルの人たちが。

「お待ちしておりました」

頭を下げると、生徒たちも。

「お世話になります」

頭を下げると、支配人が部屋の鍵が入った箱を持って来て、生徒指導の教師に鍵の入った箱を渡すと。

「じゃあ、各班の班長さんは、鍵を取りに来て下さい」

各班の班長は生徒指導の教師から鍵をもらい部屋に行き、沙織も鍵をもらい部屋に行き鍵を開け中に入ると、部屋は十畳くらいあり荷物を隅に置くと沙織が。

「ご飯なるまで、何する？」

すると、小百合が。

「私、UNO、持って来たんだ、やる？」

「やる、やる」

UNOを楽しくやってしていると、部屋の戸を叩く音がして文恵がカードを伏せ戸を開けると、学級委員の矢島貴子が立っていて文恵に言付けをして去って行き、文恵が戻って来て。

「ご飯が、出来たって」

「じゃあ、行こう？」

「うん」

カードを片付けて部屋を出て、食堂に行くとテーブルの上には沢山の郷土料理が出ていて全部食べて、部屋に戻ると人数分の布団がしいてあって、それを見た奈々は。

「うーわ、あたたかそう」

飛び込みゴロゴロし始めると、沙織たちも飛び込み一緒にゴロゴロしていると、戸を叩く音がし裕美が戸を開けると、担任が異常ないか確認して去って行き裕美が戻って来ると沙織が。

「お菓子、食べようよ」

「うん」

バックから、昼間買ったお菓子を出して、布団の中で話しながら食べて文恵が。

「そろそろ、寝よう？」

「うん、そうだね、おやすみ」

沙織が部屋の電気を消して眠りに就いた。

次の日。

「お世話になりました」

頭を下げて、バスに乗るとバスは学校に向かって走り出した、帰りにもぎやかで数時間後、学校に着き降りて運転手とガイドさんに「ありがとうございますーあ」

頭を下げ、バスは校庭から出て行くと担任から軽い連絡を受け。

「岡崎さん、帰ろう？」

「うん」

学校から出て、帰り道を歩き奈々の家の前で。

「じゃあ」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入りリビングに行き母親に。

「ただいま」

「おかえり、旅行、どうだった？」

「楽しかったよ」

荷物を洗面所に置き、部屋で雑誌を見ていると戸を叩く音がして。

「何？」

「これから、買い物に行くんだけど、何食べたい？」

「うーとね、ハンバーグがいい」

「わかった、買って来るね」

「うん、いつてらっしゃい」

母親が出て行き数分が経った時、電話がなり雑誌を閉じて電話に出た。

「はい、岡崎です」

電話の相手は、単身赴任中の父親だった。

「あつ！ お父さん元気、私もお母さんも元気だよ、うん、わかったよ言っとくね、じゃあね」

電話を切った時、母親が帰って来てリビング来て。

「ただいま」

「おかえり、お父さん、明日、帰って来るって」

「そつ、夕飯にしましょう」

「うん」

母親は夕飯の用意を始めた。

？ 帰って来た父親

今日は、5ヶ月ぶりに父親が帰って来る日。

「いつてきます」

家を出て、学校に向かい歩き校門の所で、沙織に逢い。

「おはよう、奈々」

「おはよう、沙織ちゃん」

笑顔で挨拶すると。

「奈々、いい事でもあったの？」

「うん、今日ね、お父さんが帰って来るんだ」

「奈々は、お父さん好きだからね、良かったね」

「うん」

教室に行き、授業を受けた。

放課後。

ランドセルの中に授業道具を入れていると。

「岡崎さん、帰ろう？」

「うん」

学校から出て、帰り道を歩き奈々の家の前で。

「岡崎さん」

「うん、何？」

「CDを買いに付き合ってよ」

「うん、いいよ、待ってて」

中に入り、部屋にランドセルを置き財布を持って部屋を出て、リビングに行き母親に。

「買い物に、行って来るね」

家を出て、自転車を転がしながら光良の家に向かった。

数分後。

光良は、立ち止まり。

「ここが、僕ん家だよ」

光良の家が建っている場所は、昔、空き地で遅くまで沙織たちとよく遊んでいた。

「ここって？」

「どうかしたの？」

「ここ、昔、空き地で沙織たちと良く遊んだんだ——あ」
思い出にふけていると。

「へーえ、そうなんだ、ちょっと待ってて」

中に入り数分後、光良が出て来て自転車に乗ると。

「行こう？」

「うん」

CDショップに向かった。

CDショップに着き、自転車を降りて店内に入りCDを選び始め、一枚のCDアルバムを持った、それは奈々の好きなアーティストのCDで。

「小川くん、そのアーティスト好きなの？」

「うん、岡崎さんも？」

「うん、いいよね」

「うん」

レジで支払いをして店を出て、自転車に乗り来た道を戻り光良の家の前で。

「一緒に聴こうよ？」

「うん」

家上がり、光良の部屋に入ると沢山の電気機器が置いてあり。

「好きな、ここに座って」

「うん」

その場に座ると、CDコンポに入れボタンを押すとスピーカから

音楽が流れてきて数時間後。

「私、そろそろ帰るよ」

「じゃあ、送るよ」

家を出て、自転車を転がし奈々の家の前で。

「じゃあ」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入ると玄関に見慣れた靴が脱いであって、リビングに行くところ月ぶりに見る父親がいて。

「お父さん、おかえり」

「ただいま、奈々もおかえり」

「ただいま」

笑みを浮かべていると、母親が。

「ねえ、夕飯、どうする？」

すると、父親が。

「久々に、食べに行くか？」

「わーい、行こう、行こう」

その夜、家族で近くのレストランに行った。

？ ホワイトクリスマス

2学期が終わり、今日から冬休み。

夜、遅くまでテレビを見ていたのでお昼近くに起きて部屋を出て、顔を洗いいリビングに行き母親に。

「おはよう」

「おはよう、じゃないわよ、もうお昼よ、だから早く寝なさいって言ったのに」

「だって、テレビが面白かったんだもん、それよりご飯」

「はい、はい」

キッチンに行き、遅い朝食を作ってテーブルに置くと。

「いただきます」

全部食べ、居間でテレビを見ていると、電話がなり母親が出た。

「はい、岡崎ですけど？ ちょっと、待ってて」

受話器を置き、奈々の所に来て。

「沙織ちゃんから、電話よ」

「はい」

テレビを消し、電話に出た。

「もしもし、何？」

クリスマス会で呼ぶ人を決めようよ、と言う電話で。

「今から、行くね」

電話を切り、部屋に行き着替えをして部屋を出て、リビングに行く母親に。

「沙織ちゃん家に、行ってくるね」

家を出て、自転車に乗り沙織の家に向かった。

家に着き、自転車を降りてドアチャイムを押すと、ドアが開き沙織が顔を出し。

「いらつしゃい、どうぞ」

「おじゃまします」

上がり、部屋に入ると。

「それで、誰、呼ぶ？」

「えーとね、沙織ちゃんと、文恵ちゃんと、裕美ちゃんでもいいよ」
決めると。

「男子も、呼ぼうよ」

「えっ！ 男子も呼ぶの？」

「だって、小川くんと来るんでしょう？」

「うん、じゃあ、ととでいいよ」

決めると、それぞれ家に電話をした。

「後は、小川君だけね、奈々、帰りに言ってて？」

「うん、わかった、じゃあ」

沙織の家を出て、光良の家に向かった。

光良の家に着き、自転車を降りてドアチャイムを押すと、ドアが開き光良が顔を出し。

「やあ、岡崎さん、何？」

「今夜、沙織ちゃん家で、クリスマス会をやるんだけど、行ける？」

「うん、大丈夫だよ」

「じゃあ、7時に家に来てよ」

「うん、わかった、じゃあ」

別れ、家に帰り中に入りリビングに行き母親に。

「ただいま」

「おかえり」

「今夜、沙織ちゃん家で、クリスマス会をやるから、ご飯、早めにね」

「はい、はい」

キッチンで夕飯の用意を始め、奈々は部屋に行き雑誌を見ているとあるページで目が留まった、それは（初めてのキス）と言う読者

からの投稿文で目の真ん丸くしてその文を読んだ。

（あれは、彼氏との3回目のデートの時でした遊園地で遊び、ファミレスで食事をして家に送ってもらい際にキスをしました、その時、レモンみたいな味がしました・・・）と書いてあって雑誌を閉じ。「へーえ、キスって、レモンみたいな味がするんだ、私も小川くんと・・・。」

考えていると、顔が赤くなってしまい。

「やだーあ、考えているだけで赤くなっちゃう」

言っていると、子機がなり部屋を出てリビングで夕飯を食べてテレビを見ていると。

ピンポン。

ドアチャイムが聞こえ、テレビを消し玄関に行きドアを開けると、光良が立っていて。

「お待ちどう」

「行こう?」

家を出て、自転車に乗り沙織の家に向かった。

家に着くと、6台の自転車が停まっっていて自転車から降りドアチャイムを押すと、ドアが開き沙織が顔を出し。

「いらっしやい、どうぞ」

「おじゃまします」

上がり、沙織と客間に行くと、皆いて。

「そろったから、始めよう」

目の前に置いてあるグラスを持って。

「メリークリスマス」

グラスを軽くあて、クリスマス会は始まりにぎやかにやり1時間くらい経った時、文恵が。

「沙織ちゃん、私たち帰るよ」

立ち上がると。

「俺たちも、帰るよ」

武たちも立ち上がると、沙織も立ち6人を玄関まで送り、戻って来てジュースを飲んでいると。

「沙織ちゃん、私たちも帰るよ、じゃあね」

沙織の家を出て、自転車を転がしながら帰り道を歩いていると、空から真つ白な雪が落ちて来て、それを見た奈々は。

「うわーあ、雪だ、ホワイトクリスマスだーあ」

はしゃぎながら歩き、奈々の家の前で顔を赤くして。

「ねえ、小川くん」

「何？」

「今日、読んだ雑誌にね、キスってレモンみたいな味がするんだって、ためしてみようか？」

「えっ！ う・うん」

奈々が目をつぶると、肩に手を置き唇を重ね数秒後、唇を離すと。

「味、しないね？」

「う・うん」

「でも、何か体が熱いよね」

「うん、じゃあ」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入って部屋に行き下着を持って部屋を出た。

？ お正月

日は経ち、新しい年を迎えた。

お昼近くに起きて、部屋を出て客間に行きお酒を飲んでいる父親に。

「あけましておめでとう」

新年の挨拶をして、料理を食べていると父親がポケットからお年玉袋を出して。

「奈々、はい、お年玉」

「ありがとう」

受け取り、料理食べて部屋に行きお年玉袋の中をのぞくと5千円が入っていて、貯金箱に入れて、雑誌を見ていると。

ピンポン。

ドアチャイムが聞こえ、部屋を出て玄関に行きドアを開けると、沙織と小百合と文恵が立っていて。

「おめでとう、奈々」

「おめでとう、皆、あれっ！ 裕美ちゃんは？」
すると、文恵が。

「文恵なら、家族でハワイだってさあ」

「ハハハ、さすが、お金持ち」

苦笑いしていると、沙織が。

「ねえ、初詣に行こうよ？」

「うん、いいよ、待ってて」

中に入り、部屋に行き財布を持って部屋を出て、客間に行き両親に。

「沙織ちゃんたちと、初詣に行つて来るね」

家を出て、自転車に乗って近くの神社に向かった。

神社に着き、自転車を降りて境内に行くと大勢の人が参拝をしていて、4人は賽銭箱にお金を投げ入れ手を合わせそれぞれをお願いをした、奈々は。

（これから、小川さんと仲良く出来ますように）と強く願い、その場を後にして自転車で乗ろうとした時、光良が来て。

「おめでとう、岡崎さん」

「おめでとう、小川くん」

光良は、自転車から降りて。

「もう、お参りしたの？」

「うん」

「待ってて、お参りして来るから」

境内に走って行く姿を見て。

（小川くん、何をお願いするんだろう？）

考えていると、沙織が。

「奈々、私たち用事があるから、帰るね、じゃあ」

「うん、バイバイ」

沙織たちが帰って行き数分後、光良が戻って来て。

「お待ちどう、あれ？ 竹川さんたちは？」

「用事があるんだって、帰ったよ」

「ふーん、じゃあ、家来る？」

「うん」

光良の家に向かった。

光良の家に着き、中に入り部屋でCDを聴いたりして数時間後。

「私、帰るよ」

「じゃあ、送るよ」

家を出て、自転車を転がし奈々の家の前で。

「じゃあ」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入り部屋で雑誌を見ていると子機かなり部屋を出た。

三が日が過ぎ。

書初めを終えて、洗面所で習字道具を洗っていると。

ピンポン。

ドアチャイムが聞こえ。

「どうぞ」

母親の声がして、足音は客間の方に消えて行った部屋に道具を置き客間に行くと、そこには父親の兄夫婦がいた。

「伯父さん、伯母さん、あけましておめでとうございます」

兄夫婦に新年の挨拶をすると。

「奈々ちゃん、おめでとう、そうだ!」

背広のうちポケットから、お年玉袋を出して。

「はい、お年玉」

「あ・ありがとうございます」

受け取り、部屋でお年玉袋をのぞくと1万円が入っていて、貯金箱に入れて雑誌を見ていると、部屋の戸を叩く音が貸し。

「何？」

「沙織ちゃんから、電話よ」

「はい」

雑誌を閉じ部屋を出て、リビングに行き電話に出た。

「もしもし、何？」

遊ぼう、と言う内容で。

「今から、行くね」

電話を切り。

「沙織ちゃん家に、行ってくるね」

部屋に行き、財布を持って家を出て自転車に乗って沙織の家に向かった。

家に着き、自転車を降りてドアチャイムを押すと、ドアが開き沙

織が顔を出し。

「いらつしゃい、どうぞ」

「おじゃまします」

上がり、部屋に入りブロック崩しのゲームで遊んでいると。

「ねえ、新しいゲームを買いに付き合つてよ」

「うん、いいよ」

ゲームを消し家を出て、自転車に乗りゲームショップに向かった。

ゲームショップに着き、自転車を降りて店内に入ると正月あけなので大勢の人がゲームCDを買っていて、沙織は新しいゲームCDを持ちレジで支払いをして店を出た時、光良が来て。

「やあ、岡崎さんに、竹川さん」

「小川くん、こんにちは」

「竹川さん、今日は何のゲーム買ったの？」

聞かれると、袋からゲームを出して。

「これ、買ったの」

「そのゲームは、攻略本を買ってやった方が早くクリア出来るよ」

「そうなの、じゃあ、買ってみるよ、ありがとう、小川くん、奈々、行こう？」

「うん、じゃあね、小川くん」

「じゃあ」

光良と別れ、本屋に向かった。

本屋に着き、自転車を降りて店内に入り沙織は攻略本を持ち。

「買ってくるね」

レジの方に歩いて行き、奈々はいつも買っている雑誌の新刊を見つけそれを持ちレジで支払いをして店を出て、来た道を戻り沙織の家に上がり、またゲームをして遊んで1時間後。

「私、帰るよ」

「うん、バイバイ」

沙織の家を出て、家に帰り中に入り部屋で雑誌を見ていると戸を叩く音がし。

「何？」

「夕飯、何食べたい？」

「カレーがいい」

「じゃあ、買ってくるね」

母親は家を出て行き数分後、帰って来てさらに数分後、子機がなり雑誌を閉じて部屋を出た。

？ 父親の入院

3学期が始まって、数十日が過ぎた。

「いつてきます」

家を出て、学校に向かい歩き校門の所で、光良に逢い。

「おはよう、岡崎さん」

「おはよう、小川くん」

挨拶を交わし、教室で授業を受けていると教室の戸が開き生徒指導の教師が入って来て。

「岡崎さん、ちよつと」

手招きをし、奈々が教師の所に行くと言下に出て。

「今、お母さんから電話があつて、お父さんが事故にあつたそうだ」

「えっ！ お父さんが……」

驚きを隠せないでいると、教師が紙を出して。

「これが、病院の地図だ、早く行ってあげなさい」

紙を受け取り学校から出て、家に帰り自転車に乗り父親が運ばれた病院に向かった。

病院に着き、自転車を降り中に入り受付で父親の名を言うと。

「その人なら……」

病室を聞くと、奈々は病室に走って行き病室の戸を叩いた。

「はい、どうぞ」

母親の声がして、戸を開け室内に入るとベッドの上で頭に包帯と腕にギブスをした父親が寝ていて。

「お・お父さん」

近づこうとした時。

「今、麻酔で眠った所だから」

「それで、お父さんは、大丈夫なの？」

心配そうな声で聞くと。

「大丈夫よ、骨折だけだから」

「じゃあ、私、学校に戻るよ」

病室から出ようとした時。

「奈々」

「うん、何？」

「お父さんが、気がつくまでいなくちゃなんないから」

「うん、わかったよ、じゃあ」

病院から出て、学校に戻って残りの授業を受けた。

放課後。

「岡崎さん、帰ろう？」

「うん」

学校から出て、帰り道を歩き奈々の家の前で。

「夜、ご飯、食べに行こうよ？」

「うん、いいよ」

「じゃあ、6時に迎えに来るよ」

「うん、待ってるからね」

別れ、中に入ってリビングに行き。

「ただい、そっか、病院だっけ」

部屋に行き、宿題を始めた。

そして、6時になり。

ピンポン。

ドアチャイムが聞こえ、部屋を出て玄関に行きドアを開けると、
光良が立っていて。

「お待たせ、行こうか？」

「うん」

家を出て、自転車に乗りファミレスに向かった。

ファミレスに着き、自転車を降り店内に入ると夕食時なので大勢の人が食事をしていて、キヨロキヨロしているとウエイトレスが来て。

「いらっしやいませ、何名さまですか？」

「2人です」

「では、こちらにどうぞ」

空いている席に案内してくれ、2人が座ると。

「お決まりになりましたら、お呼び下さい」

去って行くと、テーブルの横にあるメニューを取り、ひろげ選び始め数分後。

「決まった？」

「うん」

ブザーを押すと、ウエイトレスが来て。

「お決まりのしょうか？」

オーダーを取る準備をすると。

「岡崎さんから、どうぞ」

「私は、ミートソースと海草サラダとレモンスカッシュで」

「僕は、サイコロステーキセットのご飯とコーラで、以上で頼むと、インプットして。」

「少々、お待ち下さい」

去って行き数分後、料理が運ばれて来て。

「お待ちどうさまでしたーあ」

目の前に置かれ。

「ごゆっくり、どうぞ」

領収書がはさんであるプレート置いて去ると、食べ始め全部食べ食休みをして。

「出ようか？」

「うん」

プレートを持って、レジで支払いをして店を出て、来た道に戻り奈々の家の前で。

「じゃあ」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入ろうとした時、母親が帰って来て。

「どこか、行ってたの？」

「うん、友達とご飯食べに、それより、お父さんは？」

「大丈夫、ご飯食べられたから」

「よかった」

中に入って、部屋に行き下着を持って部屋を出た。

？ チョコ作り

2月に入り、明日は男の子に思いを伝えるバレンタインデー。
「いつてきます」

家を出て、学校に向かい歩き校門の前で、光良に逢い。

「おはよう、岡崎さん」

「おはよう、小川くん」

挨拶を交わし、教室で授業を受けた。

放課後。

ランドセルの中に、授業道具を入れていると。

「奈々、帰ろうよ？」

「うん」

学校を出て、帰り道を歩き沙織の家の前で。

「チョコ、買いに行こうよ？」

「うん、いいよ」

別れ、家に帰り中に入って部屋にランドセルを置き、財布を持って部屋を出てリビングに行き母親に。

「沙織ちゃんと、買い物に行つて来るね」

家を出て、自転車に乗って沙織の家に向かった。

家の前で、沙織が待っていて。

「お待ちどう」

「行こう？」

「うん」

近くのスーパーに向かった。

スーパーに着き、自転車に降りて店内に入ると大勢の女の子がチ

ヨコを選んでいて、沙織は2つのチョコを持ち奈々の所に来て。

「奈々は、買わないの？」

「今年は、作るのかな？」

お菓子売り場に行き、板チョコを3枚と「初めてのチョコ作り」と言うチョコ作りの道具が入った箱をかごに入れ、レジで支払いをして店を出て来た道を戻り沙織の家の前で。

「じゃあね」

「うん、バイバイ」

別れ、家に帰り中に入りキッチンに行き夕食の用意をしている母親に。

「ただいま」

「おかえり」

「ご飯、食べたなら、キッチン使っている？」

「いいけど、ちゃんと片付けしてよ」

「うん、わかったよ」

夕飯を食べて、片付けを手伝い母親がテレビを見始めると、買ってきたチョコを持ってキッチンに立ちチョコ作りを始めた、まず、鍋に水を張り火にかけて沸騰するまでチョコを粉々にしてボウルに入れ、沸騰して来たお湯につけるとみるみる溶け出し形がなくなるまでヘラで混ぜて、「初めてのチョコ作り」を開けてハート形の型を出しお皿の上に並べて溶けたチョコを流し込みヘラで綺麗に整えて、冷凍庫に入れ。

「ふうー」

息を吐き、部屋に行き包装紙を選び始めたが、良いのが無く財布を持って家を出て、文房具店に向かった。

文房具店に着き、自転車を降りて店内に入り包装紙が置いてある場所に行き選び始めた。

「どれに、しようかな？」

数十秒後。

「これにしようつと」

選んだのは、小さな星がちりばめられた包装紙で、レジで支払いをして店を出て、来た道を戻り家に入り冷凍庫を開けてチョコを取り出すと、見事に凍っていて。

「やったーあ、出来てる」

一つ一つ型から外し、付属の箱を作りチョコを入れ包装紙で包んでリボンを付けて。

「出来た、これでよしっ」

チョコを持って部屋に行き、下着を持って部屋を出た。

次の日。

「いつてきます」

家を出て、学校に向かい歩き校門の所で、沙織に逢い。

「おはよう、奈々」

「おはよう、沙織ちゃん」

挨拶を交わし、校庭を歩きながら。

「奈々、チョコ、出来た？」

「うん、パーテキ」

笑み浮かべながら答え、教室に行き授業を受けた。

放課後。

ランドセルの中に、授業道具を入れていると、光良の所に角田香奈と小林洋子が顔を赤くして来て、チョコを差出して。

「小川くん、これ、食べて？」

「ありがとう」

受け取ると、2人去って行き。

「岡崎さん、帰ろう？」

「うん」

学校から出て、帰り道を歩き奈々の家の前で。

「小川くん、ちょっと待ってて」

中に入り、部屋にあるチョコを持って家を出て、顔を赤くして光良に。

「こ・これ、作っただ、食べて？」
差し出すと。

「あ・ありがとう」
受け取ると。

「じゃあ」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入って部屋で宿題を始めた。

？ 退院

今日は、父親の退院の日。

「いつてきます」

家を出て、学校に向かい歩き校門の前で、光良に逢い。

「おはよう、岡崎さん」

「おはよう、小川くん」

挨拶を交わし、教室で授業を受けた。

そして、3時間目のチャイムがなると担任が原稿用紙を持って入って来て教壇に置くと。

「えー、3・4時間目は作文を書いてもらいます」

すると、生徒たちから。

「え——え」

声が上がったが、担任は原稿用紙を配り始め、全員に行き渡ると。

「6年生になつてからと言う題で2枚、書いて下さい」

生徒たちは書き始め、奈々は光良との出会いや学校行事での色々な思い出を書いていると、3時間目の終了チャイムがなり教室を出て行く生徒がいて、奈々は書き続けていると沙織が来て。

「ねえ、書けてる？」

「うん、2枚目に行ったとこ、沙織ちゃんは？」

「まだ、半分も書けてないよ」

しゃべっていると、チャイムがなり席を離れている生徒は座り続きを始め、書きあがった生徒は担任に提出しチャイムがなるまで5時間目の予習を始め、奈々も書きあがり提出し予習をしていると、チャイムがなった。

「書きあがらなかった人は宿題にします、じゃあ、給食の用意を始めて下さい」

当番が給食の用意をして、給食を食べて食休みを取り5時間目の授業を受けた。

放課後。

ランドセルの中に授業道具を入れていると。

「岡崎さん、帰ろう?」

「うん」

学校から出て、帰り道を歩き奈々の家の前で。

「じゃあ」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入りリビングに行くとな腕に包帯を巻いた父親が座っている。

「お父さん、おかえり」

「ただいま、奈々もおかえり」

「ただいま、宿題して来るね」

奈々が部屋に行こうとした時。

「奈々」

「うん、何?」

「宿題、どの位で終わるんだ?」

「1時間位で終わるよ、何で?」

「さっき、会社に電話をしたら社長が出て、自宅で快気パーティを開いて下さるそうだ、だから聞いたんだ」

「ふーん、じゃあ、して来るね」

部屋に行き、宿題を始め1時間後、部屋を出てリビングに行く。

「終わったよ」

「じゃあ、行こうか?」

社長の家の地図を持ち、家を出ると。

「社長の家は近くだから、歩いて行くぞ」

歩き始め、歩きながら。

「ここも、しばらく見ないうちに変わったなあ」

周りを見回しながら歩き、数分歩き立ち止まり。

「着いたぞ、ここが社長の家だ」

なんと、父親の社長の家は光良の家だった。

（えっ！ お父さんの会社の社長さんって小川くんのお父さん）

父親が、ドアチャイムを押すとドアが開き綺麗な女の人が。

（この人が、小川くんのお母さん綺麗）

「お待ちしました、どうぞ」

「おじゃまします」

上がり、奥さんと広間に行くとテーブルに沢山の料理が出ていて、スラッとした男の人が。

「これは、これは岡崎さん、いらっしやい」

出迎えると。

「お呼びいただき、ありがとうございます」
頭を下げる。

「きょうは、固い事は抜きで、どうぞ」

「し・失礼します」

その場に座り、料理を食べていると背後で。

「こんばんは」

光良の声がし、奈々は振り向き。

「こんばんは、小川くん」

「お、岡崎さん」

驚いていると、光良の父親が。

「光良、知ってるのか？」

「うん、僕と同じクラスなんだ」

目を真ん丸くして。

「家の子と、社員さんの娘さんが同じクラスだなんて、これは驚いた、なあ、岡崎さん」

「はあ」

2人がビールを飲んでいると。

「ねえ、部屋に行こう？」

「うん」

光良の部屋に入ると、沢山の電気製品とマンガ本があつて。

「好きなところに、座って」

「うん」

その場に座ると。

「驚いたよ、岡崎さん家のお父さんが、僕のお父さんと同じ会社で働いていたなんて」

「私もだよ」

しゃべっていると、部屋の戸がなり。

「はい、どうぞ」

すると、戸が開き奈々の母親が。

「奈々、お母さん帰るけど、どうする？」

「まだ、いる」

「そお、あまり遅くならないでね」

「うん、わかったよ」

言つと、母親は帰つて行つた。

「ジュース、持って来るから本でも見てて」

部屋を出て行くと、奈々は棚からマンガ本を出して見ていると、ベッドの下にある本が目に入り、それを取り出すとHなマンガ本だった。

「へへえ、小川くんもこういうの見るんだ」

ペラペラと捲つて見ていると、光良が戻つて来て奈々の姿を見て、驚きを隠せない顔をしていた。

「あつ！ 私、平気だよ、沙織ちゃん家のお兄ちゃんがこういう本をいっぱい持つてて、たまに2人で見てるから」

光良は、何も言わずマンガ本を出して見ていると。

「ねえ」

「何？」

奈々を見ると、赤い顔をして。

「この本と同じ事しようか？」

「えっ！ う、うん」
頷くと、ベッドに入って本と同じ事をした。

？　これからも、彼女で

3月に入り、数日が経ち。

今日は最期の行事、卒業式。

奈々は中学のスカートを履いて。

「いつてきます」

家を出て、学校に向かい歩き校門の所で、沙織に逢い。

「おはよう、奈々」

「おはよう、沙織ちゃん」

挨拶を交わし、校門をくぐると。

「ここをくぐるのも、今日で最後だね」

校庭を歩いていると、隣に光良が来て。

「おはよう、岡崎さん、竹川さん」

「おはよう、小川くん」

挨拶を交わし、教室に行くと女子たちが男子たちに手帳にメッセージを書いてもらっていて、光良が教室に入ると女子たちが光良を囲み。

「ねえ、小川くん、書いて」

「私のも」

書いていると、背広を着た担任が入って来て最後の出席を取っていると、教室に入って来て卒業生たちの胸に「ご卒業おめでとうございませう」と書かれたワッペンを付けると、教壇の前に一列に並び。

「中学に行っても、勉強と運動にガンバって下さい」

頭を下げ、教室を出て行き数分後、壁に付けてあるスピーカーから。

「卒業生は入場、お願いします」

放送が流れると、担任の指示に従い体育館に向かった。

体育館に入り、用意にしてあるパイプ椅子に座ると司会の教師が。
「只今より、第。。。回。。。小学校卒業式を開催します、始めに校
歌斉唱、一同起立」

生徒は立ち上がり校歌を歌い、続いて校長とPTA会長と来賓の方々の祝辞が終わると、卒業証書授与になり1組の担任が生徒の名前を呼ぶと大きな返事をして校長先生の元に行き卒業証書をもらい一礼しPTA会長と来賓の方々にも一礼して席に座ると、次々に呼んで行き全卒業生に渡り、在校生から歌のプレゼントをもらい卒業生も在校生に歌を贈り卒業式は幕を閉じ、5年生が作ってくれた花のアーチをくぐり体育館を出てそれぞれの教室に帰り、担任を待っているダンボールを持って入って来て教壇に置くと。

「それでは、先生から最後のプレゼントを渡しますので、呼ばれたら取りに来て下さい」

生徒の名前を呼ぶと、担任の所に行き通知表と文集をもらい席に座り全員に渡ると、ちよつと涙声で。

「今日はおめでとうございます、先生は君たちの担任になれて沢山の思い出が出来ました、

中学で沢山の事を学び、沢山の思い出を作して下さい、今日は本当におめでとうございます、じゃあ、学級委員さんお願いします」

「起立」

号令をかけると、立ち上がり。

「礼」

頭を下げると、担任は出て行き奈々が帰りの用意をしていると、沙織が来て。

「ねえ、これから皆で遊ぼうよ？」

「うん、いいよ」

「じゃあ、？分後に学校集合ね」

「うん、わかった」

席を立つと。

「岡崎さん、帰ろう？」

「うん」

学校から出て、帰り道を歩きながら。

「ねえ、小川くん、これから皆で、遊ぶんだけど、来れる？」

「うん、何も用ないから、大丈夫だよ」

答え、奈々の家の前で。

「じゃあ、帰ったら迎えに来て」

「わかった、じゃあ」

「うん、待ってるね」

別れ、中に入り部屋で着替えをして光良を待っていると。

ピンポン。

ドアチャイムが聞こえ、部屋を出て玄関に行きドアを開けると、

光良が立ってて。

「お待ちどう」

「行こう？」

家を出て、自転車に乗り学校に向かった。

学校に着くと、自転車を降りて皆の所に行き。

「お待ちどう」

すると、沙織が。

「缶蹴り、しようよ？」

「うん」

「いいぜ」

雅史が飲み終えた缶を地面に置き。

「ジャンケン、ポン」

ジャンケンで鬼を決め、数を数え始めると散らばり隠れた。

缶蹴りが終え、男女対抗でドッジをしたりして夕方になるまで遊び。

「じゃあね」

「うん、バイバイ」

別れ、それぞれの家に帰って行き、奈々は光良と自転車を転がしながら帰り道を歩き奈々の家の前で赤い顔をし。

「ねえ、小川くん」

「何？」

「私って、中学に入っても彼女かな？」

「僕の好きな人は岡崎さんだから、これからも、彼女でいてくれますか？」

「は、はい」

頷き、キスをした。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9496x/>

これからも、彼女で

2011年11月17日03時24分発行